

令和六年度京都大学書道部第百三十四回書展

冬椿展

●日時

2/15 10:00～17:30 2/16 10:00～16:00

※入場は上記の30分前まで

●場所

京都市京セラ美術館1階北西展示室

入場無料

どのように書くのか

京都大学書道部 部長 妹尾直弥

作品制作をしている時、常に二つの方向性が頭の中に混在している。一つ目は、「どのように書くべきなのか」であり、二つ目は、「どのように書きたいのか」ということである。私にとつて、この二つの思案すべき点の塩梅は、どうにもこうにもとても難しくて堪らない。今回は、私情に塗れて、巻頭言に相応しいかは知らないのだが、このことを少し書かせて頂こうと思うのだ。

書道部に入ってもう丸二年が近づいている。一回生のころ、私の作品の趣向は「どのように書きたいのか」という考えに著しく傾いていた。それはもう、壊れた鹿威しの如く傾きつばなしで、全く呆れるほどである。書きたい言葉が一度思いつけば、勢いそのまま作品に取り掛かり、なんとなく腑に落ちるまで書いて終了、といった具合。よくいえば創造的だが、その内情は作品に無責任な態度であつたなあと、今では後悔しきりである。まあ、この時期の作品もお気に入りではあるので、そう全否定するものでもないとはちよつぱり思うのだが。

二回生になって、色々な機会が重なったことや、個人的な事情もあつて、この一年間は特に書道に打ち込むことを決意した。そうしてみると、理想となる作品が見つかったものだから、今後は其処へ向けて「どのように書くべきなのか」をより考える必要が出てきたのである。これはなかなか、一年間自由に書き散らしていた人間には難しいものであつて、線の引き方、空間の取り方、リズムなどなど、一から考え直すことを迫られてしまった。それは、時に投げ出したくなる程苦しい瞬間を齎す一方で、理想に近づけていく道を辿りながら、「どのように書きたいか」と「どのように書くべきか」が初めてぴつたりと同じ方角を指したような、そんな心持ちも得て、最近は書道が楽しくて堪らない。

そんな紆余曲折を経て、気づけば時は流れ、部長として迎える初めての冬樟

展である。京都大学書道部の書展を経験する度に思うのだが、作品から「こういう風に書きたい」という想いや、筆を揮う喜びに満ちた作品が溢れ、それは何よりも代え難い魅力を醸し出している。自身の作品の出来やら運営にも気を揉みつつ、今はただ、一役員として肩の力を抜き、部員の力作をただ楽しむことに集中したい。

末筆になりますが、今書展の開催は、顧問の成田健太郎先生、田中健一先生、技術顧問の大原蒼龍先生をはじめとする多くの方々のお力添えによるものであり、この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

そして、本日は厳寒の中、京都大学書道部第百三十四回学外書展「冬樟展」にお越しくださった皆様、誠にありがとうございます。今書展は、京都市京セラ美術館というこれ以上なく素晴らしい会場で開催させて頂ける幸運にも恵まれ、部員達の力作もより輝いた書展になりました。どうぞゆつくりとご高覧下さい。

一文字一文字が現われる瞬間

田中健一（京都大学大学院文学研究科准教授）

今年度より顧問を仰せつかりました。どうぞよろしく願います。

經典の書写に「如法經」とよばれる作法があります。身心の清浄を保って書写することがその根本で、鎌倉時代の仏師運慶とその周辺による「運慶願經」が実例としてよく知られます。その奥書によれば、書き手は身心を清めて写経に臨み、一行毎に結縁する人々は三度札拝して念仏を唱えました。一卷に数日かかり、法華經全八巻で行われた札拝は五万回に及びます。料紙には良質な紙が用意され、硯に用いる水には比叡山・園城寺・清水寺から霊水を取り寄せ、軸木には春日大明神の夢告により兵火で焼失した東大寺の焼け残った柱を用いたと書かれています。

これに似た作法は仏像製作においても行われることがありました。製作のための用材として霊木が用意され、作り手が身心の清浄を保って一刀毎に三度の札拝がなされたという例もあります。また「鉈彫」とよばれる像があり、これは彫刻の表面を平滑に仕上げるのではなく、荒々しいノミ目を敢えて残して仕上げとするものです。この仕上げについては、木から神仏が顕現する様子を表現するという意見もありますが、近年、仏像を造るに際してノミを打つ音が天まで届く、その音が視覚化されているという魅力的な見解があらわれました。像を拝み、あるいは鑑賞する人は、ノミ痕に像を造る行為そのものの痕跡を見出すこととなります。

書道に無関係と思われるかもしれない内容を書き連ねました。右の諸例についてここで信仰の在り方云々を述べる積もりはありませんが、筆に墨を含ませ、紙上に一文字一文字が現われる瞬間に感じる心地よさは、近しいものがあるのかもしれない。今回の書道展で展示される作品が生み出されたその時に、書

かれたご本人がどのような思いをもち、何を経験なさったのか、会場で鑑賞することを楽しみにしています。

生誕百年 古谷蒼韻展

大原蒼龍（技術顧問、日展会友 書家）

昨年六月、京都文化博物館にて「生誕百年古谷蒼韻展」が開催されました。没後、古谷蒼韻の作品の全容を一堂に展覧した初の回顧展となりました。部員の皆さんも会場に足を運び、古谷蒼韻の書業に様々な思いを持つてくれた事と思います。沖縄から東北に至るまで、実に多くの方にご高覧いただきました。

図録の巻頭のことばでは、名だたる先生に執筆していただきました。中でも西嶋慎一先生の文には熱気さえあり「これを、私の最後の執筆とするつもりで書いた」と言われ、古谷蒼韻に対する思いが溢れていました。

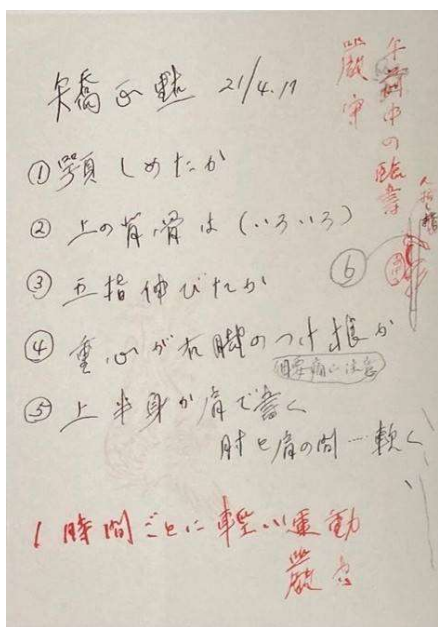
展示作品は、二十七歳作「李白詩二首」から最晩年九十七歳作の「大哉」に至るまで。また、折帖や半紙臨書など総作品数数百点を超えるものでした。若き日より多くの古典を涉猟し、深く哲学し続けた姿が少しでも見えたのではないでしょうか。

「本物の書の地下鉱脈を求め続けた」と仰っていたとおり、その根底にあるものはやはり王羲之でした。しかし、王羲之がそのまま作品に見えてくるものは少なく、況や何かの古典を直ぐに想起させるものも見当たりません。そこには日比野五鳳から若き日に言われた「何かの古典を基調としたものだといったことが、直ぐにわかるようでは底が浅い。作品の良さだけがくつきりと見え、深い感動が残り、バックボーンになるものがなかなか見えないものがない」という言葉が心の奥にあるのだと思います。然し乍ら、先生の古典主義は徹底しており、弟子達には古典の美と書法を背景に持たない作品をことのほか嫌悪し、厳しく指導されました。

先生は、臨書に対して深遠な哲学をお持ちでした。よく弟子達に「おい、臨書してるか」と声をかけられました。「臨書は模写とは違う」とされながらも、臨

書作品を持つていくと「似てへん」と喝破されたものです。思うに「臨書とは其の古典の美の核となるものを抽出し、作家の体内に取り込み、如何に作品へと結びつけていけるか」という事なのでしょう。

線と執筆に対しても常に深く考えていらつしやいました。日本画家 村上華岳の「線の行者」という言葉を大切にされており、「良い線をひくには執筆法が重要である。執筆法と用筆法は相關関係にある」と話されていました。先生は午前中に臨書をされていました。南面の机上にて半紙臨書を行う前に、自身のメモを確認してから筆を取られていました。これは晩年まで続けておられた事ですので、如何に重要な事なのかが分かります。



今回の図録と小冊子は多くの作家から大変な好評を得ており、とても深い内容となっています。此の展覧会と図録などから深く学びとり、部員の書作や部の発展に繋げてくれる事を切に希望します。

作品制作の方法―臨書と創作―

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それを真似て書くことを臨書と言います。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのが良いとされます。

(1) **形臨** 文字の形や筆遣いを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2) **意臨** 形に拘らず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っているときに筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写しとったもの）だけが残りの元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3) **背臨** 古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、一つの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

臨書の対象となる古典が載る冊子を法帖と言います。初めから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で書かれたものもあります。

京大書道部の書展では、臨書作品の場合キャプションに臨書した法帖を掲示しています。ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作と言います。

自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体、書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を活かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

闇雲に言葉を書くのではなく、自ら感動や想いを言葉に託し、それに合った表現を探して書くのが創作作品です。

作品の構成―印と落款―

落款

作品の末尾に書く署名とそれ続けて押す印を落款・落款印と言います。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、製作した場所や時間を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置に押す遊印が加えられることがあります。

書の分野と有名古典について

漢字には楷・行・草・隸・篆の五つの書体があります。数千年前に、身の回りの事物を書き記さんとする行為によって象形的な篆書が生まれ、文字としての美しさや抽象性、実用性を求める中で隸書が発展しました。現代でもよく使われている楷書・行書・草書はこの篆書と隸書を基盤として作られた書体です。一方で、仮名・調和体は、日本が中国から漢字を輸入し独自に書法を発展させてきた結果生まれた書の分野と言えます。

一口に〇書と言っても、書く者の呼吸や心の動き、如何なる結体を良しとするかという考え方や経験などによって、その書が持つ趣は変化します。そこに書の面白さや芸術性が在るのではないのでしょうか。ぜひ以下の有名な古典や色々の作品などを見比べて、その面白さを体験してみてください。

「楷書」は永字八法と呼ばれる、点・画・転折・払いに関する一定の規則によつて書かれる書体です。その書法は唐代に完成され、堂々たる威厳と流麗な美しさを併せ持つ素晴らしい古典が多く残されています。



画像…九成宮醴泉銘（欧陽詢）

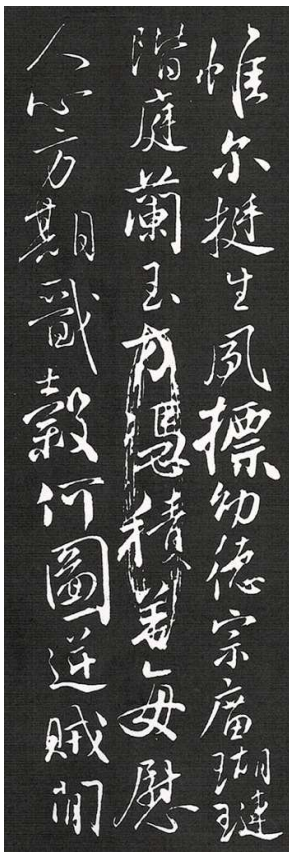
「行書」は一般的に隸書の速書き体として生まれたと言われており、点画を繋げたり省略したりして書かれる書体です。崩し方はさまざまで、曲線を軸とした流線的な書風もあれば、直線を軸とした力強い書風もあります。



画像…蘭亭序（王羲之）

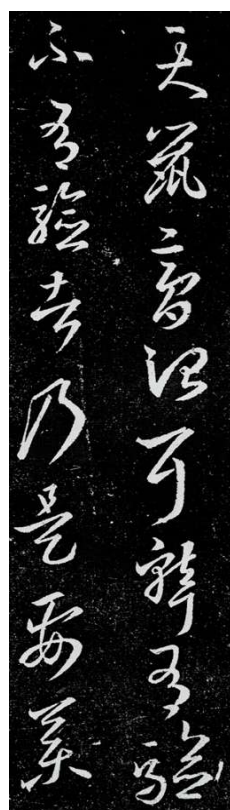


画像…詩稿（吳昌碩）

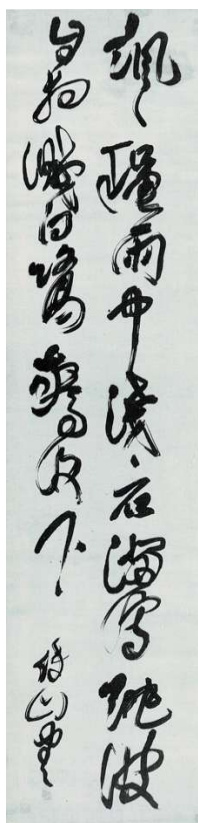


画像…祭姪文稿（顏真卿）

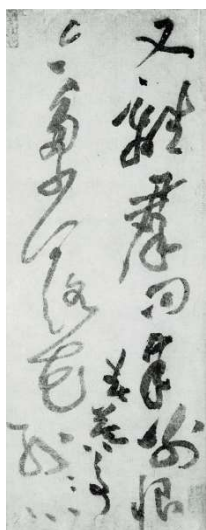
「草書」もまた隷書の速書き体として、漢代に起こった書体です。唐代までに一定の崩し方が確立された後、宋から明・清にかけて、その自由度の高さに表現性を見出した能書家らによって芸術性が高められました。



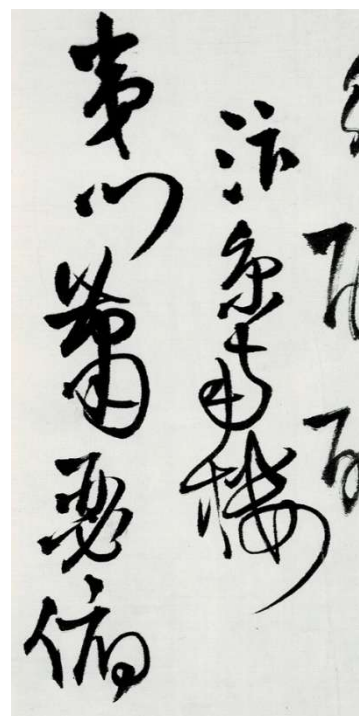
画像…十七帖（王羲之）



画像…五言絶句四屏（傅山）



画像…李太白憶旧遊詩卷（黄庭堅）



画像…草書七律五首卷（王鐸）

「隷書」は篆書から発展し、五体の中で唯一「波磔」と呼ばれる払いのような横画を持つ書体です。文字として整えられつつも篆書の象形的な字形が残っており、筆法もまだ習熟していない段階ともいえませんが、かえってそこに造形美と素朴な古拙の風味を併せ持つ魅力を見出すことができます。



画像…曹全碑（筆者不明）

「篆書」はその絵的な造形に特徴がある最古の書体です。世界に存在する事物と文字とを初めて繋げた記号であり、その字形から想起されるイメージによって、豊かな表現性を持っています。漢字の意味を知らない人にも魅力が伝わる作品を書くことができます。



画像…石鼓文（筆者不明）

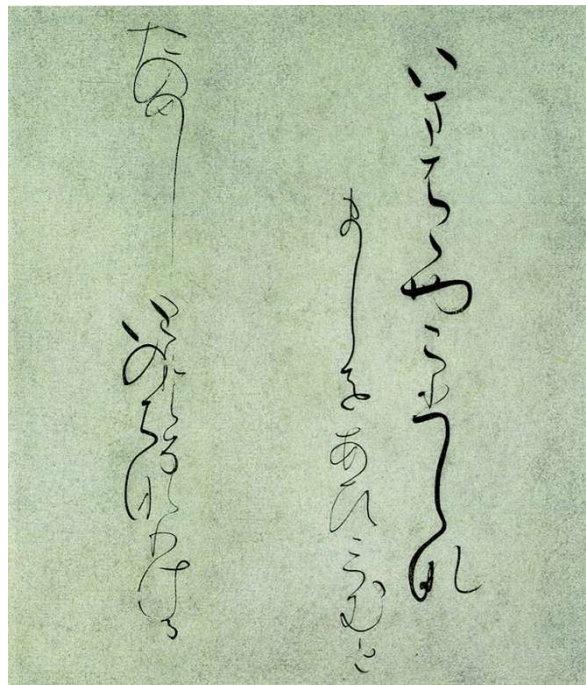


画像…臨石鼓文（呉昌碩）



画像…自書七言絶句十二屏（傅山）

「かな」は日本語の音を割り当てた漢字の一部を変化させて作られた、日本固有の書法です。柔らかく流れのある運筆が特徴的で全体に寛雅な雰囲気を持っています。散らし書きという独自の構成法も漢字書には無い魅力の一つです。



画像…升色紙（伝行成）

「調和体」あるいは「近代詩文書」は戦後に一般的な可読性を重視する動きによって起った書法です。文学作品や詩・短歌・俳句、歌詞やセリフといった題材を用いるので、文意を加味した文学性のある、また書道をしていない人にも親しみやすい作品を作ることができます。

（著作権の関係上、画像の掲載は控えさせていただきます。）

作品一覽

賛助作品

大原蒼龍……………創作・『遐福』……………11

個人作品

一回生

石川和樹……………臨書・『牛櫛造像記』……………16
 桂木結紅……………創作・『坐断』……………18
 河合真弥……………創作・『楊炯詩』……………11
 越中優奈……………臨書・『石鼓文』……………12
 近藤咲耶……………臨書・紫式部『鈴虫（源氏物語）』……………20
 ……臨書・孫過庭『書譜』……………18
 ……臨書・褚遂良『雁塔聖教序』……………20
 坂本莉子……………臨書・顔真卿『多宝塔碑』……………21
 櫻井すみれ……………創作・『百人一首三十一番坂上是則の歌』……………22
 新長慎之助……………臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……………22
 竹内悠太……………臨書・懷素『千字文』……………24
 田中碧……………臨書・王羲之『蘭亭序』……………24
 洞井美菜子……………創作・『枕草子』……………24
 遠山菜々香……………創作・『安呉論書』……………13
 奈良岡諒亮……………臨書・趙孟頫『玄妙觀重脩三門記卷』……………26
 野村百加……………臨書・米芾『德忱帖』……………14

二回生

原田明澄香……………臨書・伝紀貫之『高野切第三種』……………21
 藤木庸……………創作・『旧交を温める』……………27
 ……創作・『江南春望』……………27
 ……臨書・藤原行成『白氏詩卷』……………14
 ……創作・『血湧き肉躍る』……………26
 星出茉莉……………臨書・王献之『地黄湯帖（鬱岡齋帖）』……………28
 柳田陸……………臨書・『牛櫛造像記』……………27
 ……臨書・顔真卿『多宝塔碑』……………28
 ……臨書・伝藤原行成『升色紙』……………29
 岩崎沙奈……………創作・『雪待つ蕾（少女）』……………18
 影山稜真……………創作・『高適詩』……………11
 加藤杏次郎……………臨書・蘇軾『李太白仙詩卷』……………18
 ……臨書・『王杖詔書令』……………11
 ……臨書・劉炳森『明北京城城墙遗址維修記』……………17
 川上雪乃……………創作・『口車に乗せた白兔、石車に乗る』……………19
 鈴木理仁……………臨書・『張猛龍碑』……………12
 妹尾直弥……………創作・『五言律詩軸』……………13
 ……創作・『無題』……………13
 ……創作・『薄明光線』……………23
 中野花音……………創作・『淑気黄鳥』……………38
 ……創作・『Bump of 』……………29
 廣田千裕……………臨書・伝紀貫之『高野切第一種』……………26
 松田陽南子……………臨書・橘逸勢『伊都内親王願文』……………29

吉田慎二郎……………創作・『國破れて山河在り』……………26

……………創作・『若鮎』……………31

……………創作・『新幹線』……………33

……………創作・『一鶴』……………32

……………創作・『陸游の詩句』……………14

……………臨書・『高貞碑』……………27

三生

植村亮……………創作・『李白詩』……………17

川崎麻衣……………臨書・王鐸『三汧江野情』……………12

齋藤亜紀……………創作・『秋』……………21

永田はるな……………臨書・黃庭堅『松風閣詩卷』……………40

松阪明日香……………創作・『寄り添う』……………28

八木宜大……………創作・『和康五望月有懷』……………15

山田健太……………臨書・藤原佐理『恩命帖』……………30

……………創作・『徒然草』……………31

リード・オリ……………創作・『朽葉の上』……………32

四回生

青山尊……………創作・『雲高氣静』……………15

……………創作・『東海高校野球部』……………16

木下美優……………創作・『香炉峰の雪』……………19

木村隼翔……………創作・『景初四年鏡』……………20

城本昌明……………創作・『自彊不息』……………22

須田光太郎……………創作・『草枕』……………12

南出祐希……………臨書・紀貫之『高野切第一種』……………16

由里本陽香……………創作・『光陰如流水』……………29

五回生

戸高海……………創作・『萩原恭次郎詩 斷片』……………25

……………創作・『飲中八仙歌』……………25

六回生

釜田弘一朗……………臨書・徐三庚『天発神識碑』……………19

近藤毅……………創作・『回顧』……………21

修士一回生

素鴻……………創作・『鴨川觀満月』……………23

修士二回生

乾未樹……………創作・『モアより』……………17

……………創作・『あめのひととき』……………17

合作

青山尊（四回生）、木村隼翔（四回生）、小谷大翼（四回生）、城本昌明（四回生）、須田光太郎（四回生）	創作・『道德為師友』	33
中野花音（二回生） 植村亮（三回生）	創作・『改』酒バケ』	33
樋口珠穂（二回生）、松田陽南子（二回生）	創作・『春よ、来い』	33
加藤杏次郎（二回生）、星野真帆（二回生）	創作・『悟りを開く』	34
妹尾直弥（二回生）、植村亮（三回生）、須田光太郎（四回生）、戸高海（五回生）、乾未樹（修士二回生）	創作・『五感の和歌』	35
植村亮（三回生）、戸高海（五回生）	創作・『出塞行』	40
妹尾直弥（二回生）、松田陽南子（二回生）	臨書・黄庭堅『李太白憶旧遊詩卷』	36
齋藤亜紀（三回生）、永田はるな（三回生）、松阪明日香（三回生）	創作・『凍港』	36
近藤毅（六回生）、須田光太郎（四回生）	創作・『游雲』	37
妹尾直弥（二回生）、戸高海（四回生）	創作・『杜甫 夏夜嘆』	15
加藤杏次郎（二回生） 妹尾直弥（二回生） 中野花音（二回生） 吉田慎二郎（二回生）	創作・『四寸法師』	37
櫻井すみれ（一回生）、岩崎沙奈（二回生）、加藤杏次郎（二回生）、妹尾直弥（二回生）、中野花音（二回生）、永田はるな（三回生）、八木宣大（三回生）、	臨書・伝紀貫之「寸松庵色紙」	39
山田健太（三回生）、リード・オリ（四回生）、岡雅博（五回生）	創作・『有難う』	31
乾未樹（修士二回生）、釜田弘一朗（六回生）、近藤毅（六回生）	創作・『一期一会』	34
中西結希乃（四回生）、由里本陽香（四回生）	創作・『藍炎寄縁』	38
倉橋あい（修士一回生）、須田光太郎（四回生）	創作・『凝神著書澄懷觀道』	38
戸高海（五回生）、近藤毅（六回生）	創作・『四回生卒業合作』	35
四回生有志	創作・『傷我癖』	34
加藤杏次郎（二回生） 妹尾直弥（二回生） 中野花音（二回生）	創作・『（一）』	34
中野花音（二回生） 水嶋蒼来（三回生）		

賛助作品

技術顧問 大原蒼龍 先生

「遐福」

新年に相応しく吉語を書きました。気迫の線の深さが出ていれば幸いです。



1

影山稜真 二回生

創作 『高適詩』 二八

「征馬向邊州蕭々嘶未休思深常帶別聲斷爲兼秋岐路風將遠關山月共愁贈君從此
去何日大刀頭」

遂に、二八縦行草へ突入。



2

加藤杏次郎 二回生
臨書 『王杖詔書令』 二八

「制詔御史。年七十以上。人所尊敬也。非首。殺傷人。母告劾。也母所坐。年八十以上。生日久乎。年六十以上・・・」

木簡ってなんだか、不思議な魅力がありますよね。ゴリラのシャバーニのバックハグブランケットが欲しいと叫び続けて、数分が経過したところです。

3

河合真弥 一回生

創作 『楊炯詩』 二八

「烽火照西京心中自不平牙璋辭鳳闕鐵騎繞龍城雪暗凋旗畫風多雜鼓聲
寧爲百夫長勝作一書生」

字集めが楽しかったです。字集め？字探し？自分探しのかもしれないです。



4 河合真弥 一回生
臨書 『石鼓文』 二八

「靈雨瀾流■滂盈…」
篆篆篆篆篆…篆篆篆篆篆篆。てんごく。

5 川崎麻衣 三回生
臨書 王鐸『三汧江野情』 二八

「憐極々復好。不是野情希。江水猶知去。山農且未歸。梧青新露下。煙白遠鐘微。誰識空潭裏。蘇門靜石扉。」

本来はこの後に詩の題、干支が本文と同じ大きさを書かれています。それは作品の体裁を整えるためであり、行き当たりばつたりに書かれた作品だそうです。

私はまだ自分の書を信じていることができていません。いつか自分の気の赴くがままに作品を仕上げられたらな、という思いで臨書しました。

6 鈴木理仁 二回生
臨書 『張猛龍碑』 二八

「涼州武宣王大沮渠時建威將軍武威太守……」
初心に返って……。

7 須田光太郎 四回生
創作 『草枕』 二八

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」

書展に行くたびに、とかくに人の書は読みにくい、という感を抱きますが、声に出して読んでみると不思議とすら読めるときがあり、心地よさを覚えまう。読みにくさが高じると、書の鑑賞が生まれ、かえって読めることの喜びを一層よく知ることができるのかもしれない。

8 妹尾直弥 二回生
創作 『五言律詩軸』 二八

「回塘分越水 古樹積吳煙・・・」
傳山風です



9 妹尾直弥 二回生
創作 『天動』 二八

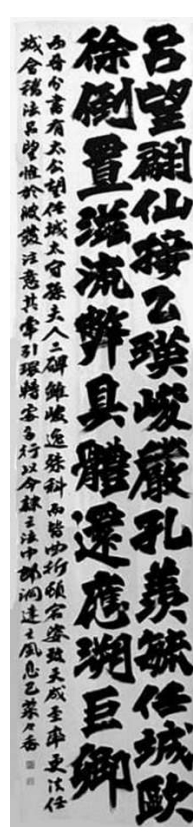
「燦々と・・・」

天動な気がしてきた。



10 遠山菜々香 一回生
創作 『安呉論書』 二八

「呂望翩仙接乙瑛、峻巖孔羨毓任城。歐徐倒置滋流弊、具體還應溯巨卿」
今年ぶりに制作しました。北魏楷書ならではの重厚感を出せたのではないかと
思います。



11 永田はるな 三回生
臨書 黄庭堅『松風閣詩卷』 半切

「老松魁梧數百年」

やってみたいと思っていたことを詰め詰めしました。半切一行書、松風閣詩卷。
最近のマイブーム食べ物はきのこです。



12

野村百加 一回生

臨書 米芾『德忱帖』 二八

「五月四日芾啓……」

高校時代に一度書いた作品ですが、もう一度挑戦しようと思いました。ダイナミックな大きさと筆使いで書きました。

五月四日芾啓
書為尉審道味清主
波施報也外君能主之他以此見未有
所出蹄跡不能容吞舟用士泛海客
百加

13

吉田慎二郎 二回生

創作 『陸游の詩句』 三尺四尺

「樓船夜雪瓜洲渡、鐵馬秋風大散關。」

秋の篆書が面白い。

樓船夜雪瓜洲
渡鐵馬秋風
大散關
吉田

14

藤木庸 一回生

臨書 藤原行成『白氏詩卷』

「九燭臺前十二妹 主人留醉任歡娛 飄飄舞袖雙花蝶 宛轉歌聲一索珠
坐久欲醒還酩酊 夜深臨散更踟躕 南山賓客東山妓 此會人間曾有無」

九燭臺前
十二妹主人
留醉任歡娛
飄飄舞袖雙
花蝶宛轉
歌聲一索珠
坐久欲醒
還酩酊
夜深臨散
更踟躕
南山賓客
東山妓此
會人間曾
有無
白氏詩卷
藤木庸

15

八木宣大 三回生

臨書 王鐸『臨王獻之安和帖幅』 二八

「奉別告承安和慶慰極冷不審尊体復何如献之比日如復小勝因夜行忽復下如欲作痛今服藥盡溫燥理冀當可耳然異極都不得復小失和卿惡亦不復得妄近生冷」

条幅の大きさを再現するために縦横比に拘りました。王鐸についてはまだまだ勉強中です。

16

妹尾直弥 (二回生)、戸高海 (五回生)

創作 『杜甫 夏夜嘆』 二八

「永日不可暮，炎蒸毒我腸。安得萬里風，飄颻吹我裳。昊天出華月，茂林延疏光。仲夏苦夜短，開軒納微涼。虛明見絳毫，羽蟲亦飛揚。物情無巨細，自適固其常。念彼荷戈士，窮年守邊疆。何由一洗濯，執熱互相望。竟夕擊刁鬥，喧聲連萬方。青紫雖被體，不如早還鄉。北城悲笳發，鸛鶴號且翔。況復煩促倦，激烈思時康。」
張璠圖をベースに、一緒に創作の草稿を考えて、文字群ごとに交互に書きました。とても楽しかったです！

永日不可暮炎蒸毒我腸安得萬里風飄颻吹我裳昊天出華月茂林延疏光仲夏苦夜短開軒納微涼虛明見絳毫羽蟲亦飛揚物情無巨細自適固其常念彼荷戈士窮年守邊疆何由一洗濯執熱互相望竟夕擊刁鬥喧聲連萬方青紫雖被體不如早還鄉北城悲笳發鸛鶴號且翔況復煩促倦激烈思時康

17

青山尊 四回生

創作 『雲高氣靜』 半切

「雲高氣靜」

合宿所に飾ってあった額縁にインスピレーションを受けました、いわゆるパクリです。

雲高氣靜

尊書

18

青山尊 四回生

創作 『東海高校野球部』 B4用紙

「第101回全国高校野球選手権愛知大会・・・」

高校野球部のメンバー表を書きました。誰やねんて感じですよ。

第101回 全国高校野球選手権愛知大会

東海高等学校		選手名 (フリガナ)		背番号
行番	守備位置			
1	遊	青山	尊	6
2	二	寒河江	健心	4
3	三	地本	大晴	9
4	右	三好	賢百	7
5	捕	小淵	啓太	2
6	投	青木	健輔	1
7	左	後藤	雅樹	14
8	一	花井	壮悟	3
9	中	鬼頭	新太郎	13
監督		鈴木孝弘		記録員
				上田 明斗南

19

中野花音 二回生

臨書 『曹全碑』 二六

「君諱全字景完敦煌效穀人也其先蓋・・・」

上手にできました！☆石碑まるまる再現してみました☆もういつそ巨大の石を彫りたかったものですな。

20

石川和樹 一回生

臨書 『牛橛造像記』 全紙

「太和十九年十一月。使持節司空公長樂王兵穆陵亮夫人尉遲。爲亡息牛橛。請工鑲石。造此彌勒像一區。願牛橛捨於分段之鄉。騰遊無礙之境。若存託生。生於天上諸佛之所。若生世界。妙樂自在之處。若有苦累。卽令解脫。三塗惡道。永絕因趣。咸蒙斯福。」

まっすぐのキレを藤川球児にするのが難しかったです。

太和十九年十一月使持節司空公長樂王兵穆陵亮夫人尉遲爲亡息牛橛請工鑲石造此彌勒像一區願牛橛捨於分段之鄉騰遊無礙之境若存託生生於天上諸佛之所若生世界妙樂自在之處若有苦累卽令解脫三塗惡道永絕因趣一切衆生咸蒙斯福

尉遲爲牛橛造像記 和樹

21

南出祐希 四回生

臨書 紀貫之『高野切第一種』 色紙

「梅の香を袖に移して 留めてば 春は過ぐとも 形見ならまし」
卒業が寂しいです

22

乾未樹 修士二回生

創作 『モアより』 二六

「葛藤に終わりなどはないんだ 勝手に辞めているだけなんだ」

日食なつこさんの『モア』より。大学生活で聞いた曲の中で印象に残った歌詞を書きました。

「モア」というのは、進化の過程で翼を失くし、今は絶滅した鳥類の一つです。天敵の居ない楽園で安住することなく、地獄で落ちないように飛び続ける、そんな決意を込めました。

23

植村亮 三回生

創作 『李白詩』 半切

「名花傾国兩歎、常得君王帶笑看、
解積春風無限恨、沈香亭北倚欄干」
院試頑張ります

24

乾未樹 修士二回生

創作 『あめのひととき』 豆色紙

「慈雨」

雨の日に書きました。

雨は、その日を記憶に刻むために降る、とどこかで聞いたような…。

天(あま)からふる雨(あめ)、そんな言葉あそびをする今日この頃です。

25

加藤杏次郎 二回生

臨書 劉炳森『明北京城牆遺址維修記』 全紙

薊・・・

「明北京城牆遺蹟維修記北京城的興起始於周初去今已三千餘年其原始聚落日薊・・・」
今年は細字の隷書がマイブームです。今回は劉体隷書と呼ばれるものを書いてみました。頑張ります。頑張りました。頑張れました。

26

岩崎沙奈 二回生

創作 『雪待つ蕾（少女）』 半切

「うめの花咲けるが中にふくめるは恋やこもれる雪をまつとか」
 二月雪が降り積もるのを待っている梅の蕾。そしてバレンタインといえは恋、
 雪待つ梅の蕾が恋する少女を擬人化させられる詩を書いてみました。

27

桂木結紅 一回生

創作 『坐断』 半切

「坐断」

「坐断」の意味は、とらわれた考えや執着心などを断つ・断ち切るという意味らしいです。頑張りたいと思います。

28

加藤杏次郎 二回生

臨書 蘇軾『李太白仙詩卷』 半切二聯

「人生燭上華光滅巧妍盡春風繞樹頭日与化工進」
 霞

初めて二聯作品を書くことになりました。洗濯機の洗濯槽を電源入れてない状態で動かせることを最近僕に教えてくれたユーチューバーさん、ありがとうございます。

29

近藤咲耶 一回生

臨書 孫過庭『書譜』 半切

「夫蔡邕不謬賞孫陽不安顧者以其玄鑑精通故不滯於耳目也向使奇音在爨庸聽驚其妙」

書譜はものすごいスピードで書いたとされています。私には到底たどり着けない領域ですね。

30

川上雪乃 二回生

創作 『口車に乗せた白兔、石車に乗る』 24×130cm

「故此大國主神之兄弟八十神坐然皆國者避於大國主神所以避者八十神各有欲婚稻羽之上比賣・・・」

『因幡の白兔』を題材にした作品です。

物語の世界を紙の上で表現する難しさと同じ向き合いながら遊び心を込めて作品を作り上げました。

32

川久保毅 修士一回生

臨書 王羲之『蘭亭序』 半切

「趣舍萬殊靜躁不同當其欣：隨事遷感慨係之矣」

蘭亭序が書きたくて蘭亭序を書きます。節操がないので書きたくない部分は省略しました。

33

木下美優 四回生

創作 『香炉峰の雪』 半切

「遺愛寺鐘欹枕聽 香炉峰雪撥簾看」

枕草子の有名なエピソード「香炉峰の雪」のもとになった白居易の詩の一節を書きました。もともと源氏物語が好きで今年の大河ドラマを見ていたのですが、清少納言と定子の関係性もとても素敵で、枕草子も改めて読み返したいなと思っています。

31

釜田弘一朗 六回生

臨書 徐三庚『天発神讖碑』 半切

故此大國主神之兄弟八十神坐然皆國者避於大國主神所以避者八十神各有欲婚稻羽之上比賣・・・

「八月日詔遣中書郎行大將軍裨將軍關内侯九江費宇行視更得二解字」
初の篆書に挑戦しました。

遺愛寺鐘欹枕聽
香炉峰雪撥簾看

美優 書

臨書 紫式部『鈴虫（源氏物語）』

「ずむし十五夜の(農)ゆ(遊)ふぐれに(二)、仏のお(於)ま(万)へに
(二)・・・」

すゝ

[illegible]

臨書 褚遂良『雁塔聖教序』

「大唐太宗文皇帝……」

初めて細字に挑戦しました。体力ついた気がします。

大唐太宗文皇帝製三藏聖教序

蓋聞二儀有象顯覆載以含生四時無形潛寒暑以化物是以窺天鑒地庸愚皆識其端明陰洞陽賢指其無形也故知天地苞乎陰陽而易識者以其有象也陰陽寥乎天地而難窮者以其無形也故知象顯可徵雖愚不惑形潛莫覩在智猶迷況乎佛道崇虛乘幽控締弘濟萬品典御十方舉威靈而無上

曠於臨

創作 『景初四年鏡』 色紙

「景初四年五月丙午之日陳是作鏡吏人詔之位至三公母人詔之保子宜孫壽如金石分」

京都府の広峯の古号墳から出土した「景初四年鏡」と呼ばれる「銘帯龍虎鏡」の銘文を書きました。景初とは魏の元号であり、景初四年に鑄造されたことが書かれています。景初四年は紀元後二四〇年ですが、景初自体は文獻上三年で終わっているのです、この鏡をどういう評価をするべきか議論が分かれています。

景初四年(正始元年)辺りの時代の書体は篆書・隸書が衰退し始め、楷書・行書・草書に移り変わる過渡期とされているらしいので、実際の拓本資料を見ながら、篆書と楷書のハイブリッド形式を意識してみました。

37

近藤毅 六回生

創作 『回顧』 全紙

「この日々は二度と戻らぬがそれでいい 振り返ればいい温めればいい」
京大書道部での最後の作品です。六年間本当にお世話になりました。入学した
てのころ仲良くしていただいた先輩にも、ここ最近仲良くしてくれている後輩
にも、深く深く感謝です。学生と言うぬるま湯から出るときが来ましたが、これ
からも心の中で思い出を追い焚きして時々浸ろうと思います。



38

坂本莉子 一回生

臨書 顔真卿『多宝塔碑』 半切

「大唐西京千福寺・・・」
かつちりとした雰囲気になるように意識しました。太い部分と細い部分の差を
つけるのが難しかったです。メンタル面の成長が大きい作品でした。

39

齋藤亜紀 三回生

創作 『秋』 半切

「北風吹白雲萬里渡河汾心緒遙搖落秋聲不」
かつちりとした雰囲気になるように意識しました。太い部分と細い部分の差を
つけるのが難しかったです。メンタル面の成長が大きい作品でした。



40

原田明澄香 一回生

臨書 伝紀貫之『高野切第三種』 色紙

「きよはらのふかやぶ ふゆなれどはるのちかければ なぐきよりぞ
はなはちりける」

春は近い、だなんて言えないほど寒い日々が続いていると思いますが、冬樟展
当日は立春を過ぎ、暦の上ではもう春。暖かい季節を心待ちにしながらかきま
した。

41

櫻井すみれ 一回生

創作 『百人一首三十一番坂上是則の歌』 半切

「あさぼらけ有明の月とみるまでによしののさとにふれるしら雪」
初めてのかな創作です。文字の配置・構成を意識しました。

42

新長慎之助 一回生

臨書 欧陽詢『九成宮醴泉銘』 半切

「始以武功壹海内。終以文德懷遠人。東越青丘。南踰丹徼。皆獻琛奉贊。重譯來王。」

とても難しく、泣きそうです。

43

城本昌明 四回生

創作 『自彊不息』 半切

「自彊不息」
たゆまず努力を続ける、という意味です。

「詩文面」

簇簇悠川花草滋、鷺群鴨憩士閑而。靜林闊苑承歡笑、明鏡徐湖託渺思。
日暮楓都之遯岸、歲沈花夜向新禧。霄窮雲散尋無月、奚得共酣玉兔時。

「題字面」 寧靜致遠

海上生明月，天涯共此時。再逢中秋明月，鴨山閑士獨坐於鴨川河畔，望月思鄉，然鄉為匪染，余心故無所依，又何以矣！但望東瀛彼岸，思春時往事，聊有芬芳者未謝，以迎暖梅之盛，此可待乎？交諸思緒，糅於一筆，遂作此詩。
四年前に作った自作七言律詩を改良し、素鴻の想いを馳せ、この扇子作品にした。

「止攝之韻 *1」



「薄明光線」

好きな歌詞。



46

竹内悠太 一回生

臨書 懷素『千字文』 半切

「知過必改。得能莫忘。罔談彼短。靡恃己長。」

千字文は一晚で作られたとのこと。恐ろしいですね。腱鞘炎とかいう概念が無いのか。

冬はつとめて
雪の降りなるは
いふまでも
あらず

冬はつとめて
雪の降りなるは
いふまでも
あらず

悠太 略

47

田中碧 一回生

臨書 王羲之『蘭亭序』 半切

「夫人之相與俯仰一世或取諸懷悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外」
みんながのびのびと思うままに生きる情景が明瞭に浮かんでくる文章です。のびのびとした線で文章のイメージに沿うことができているでしょうか。

夫人之相與俯仰一世或取諸
懷悟言一室之內或因寄所
託放浪形骸之外

甲辰歲師走碧略

48

洞井美菜子 一回生

創作 『枕草子』 色紙

「冬はつとめて・・・」

冬らしさを感じられるように書きたいと思ってます

冬はつとめて
雪の降りなるは
いふまでも
あらず

霜のいと白きも
またさうでも
いと寒きに

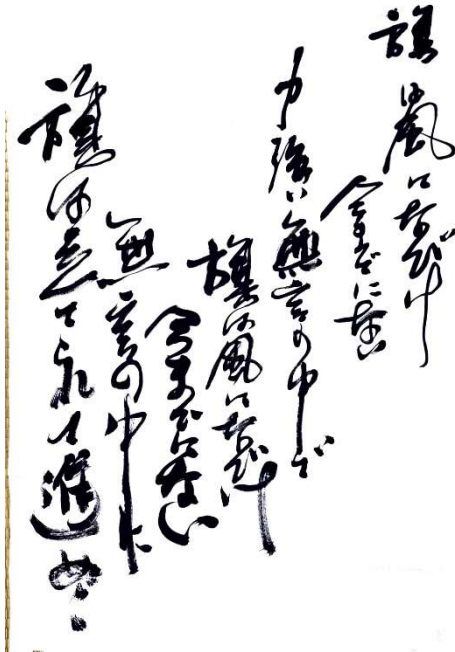
火などいそぐなるは
炭もてわたるも
いとさびき

昼になり
ゆるるるもいづれは
火桶の火も
白き灰がたになりて
わづし

「枕草子」から
美菜子書

「旗は風になびけ 今までにない力強い無言の中に 旗は風になびけ
今までにない無言の中に旗は立てられて進め！」

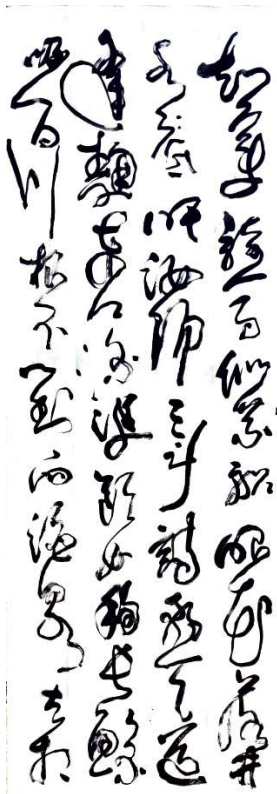
萩原恭次郎の詩集「断片」より「断片2」という詩を書きました。力強さとエネ
ルギーがみなぎるこの詩を、できるだけ率直に、受け取ったイメージのままに、
表現しました。



「知章騎馬似乘船 眼花落井水底眠 汝陽三斗始朝天 道逢麴車口流涎
飲如長鯨吸百川 恨不移封向酒泉 左相日興費萬錢 銜杯樂聖稱避賢
宗之瀟灑美少年 拳觴白眼望青天 皎如玉樹臨風前 蘇晉長齋繡衾前
醉中往往愛逃禪 李白一斗詩百篇 長安市上酒家眠 天子呼來不上船
自稱臣是酒中仙 張旭三杯草聖傳 脫帽露頂王公前 揮毫落紙如雲煙
焦遂五斗方卓然 高談雄弁驚四筵」

飲中八仙歌は杜甫の有名な詩で、書家から詩人に至るまで様々な分野の酒豪
人について、お酒にまつわる肖像のような内容だ。そして、今までたくさんの書
家がこの詩文を書いてきた。どれも天真爛漫な狂草で書かれ、それぞれの書家
の作品群のなかで重要な作品になっているように思う。

狂草の代名詞とも言えるこの詩文。現在地を確認して等身大の自分を記録する
ために、大学生活を終える今、書き残したいと思う。



51

奈良岡諒亮 一回生

臨書 半切 『玄妙觀重脩三門記卷』

「天之牖民道若大路未有不入由戸」

楷書のいい感じのものを選んで書きました、、！前回よりも成長しているとい
いな、！

天之牖民道若大路
未有不入於由戸

諒亮臨

52

藤木庸 一回生

創作 『血湧き肉躍る』 全紙

「血湧肉躍」

大学に入って、書道部に入って、感じた「楽しい」と言う感情をぶつけました。

血湧肉躍

庸書

53

廣田千裕 二回生

臨書 伝紀貫之『高野切第一種』

か」

この和歌がきっかけで、「こころざし」という言葉にはいくつも意味があるとい
うことを知りました。

「こころざしふかくそめてしおりければきえあへぬゆきのはなとみゆる

54

吉田慎二郎 二回生

創作 『國破れて山河在り』 半切四聯

「國破れて山河在り。城春にして艸木深し。」
木簡とひらがなは調和しますかね。

國破れて

山河在り

城春にして

艸木深し

55

藤木庸 一回生

創作 『旧交を温める』 半切

「懐かしみ語り微酔い月ぬ宵」

久しぶりに会った友人と話の尽きない楽しい夜を過ごしました。

56

柳田陸 一回生

臨書 『牛櫛造像記』 半切

「妙樂自在之處。」

初めて牛櫛造像記に挑戦します。ずっとかつこいいなあと思っていたので、作品にできることが嬉しいです。

57

藤木庸 一回生

創作 『江南春望』 半切

「千里鶯啼綠映紅水村山郭酒旗風」

初めて篆書に挑戦しました。集中力を要する書体ですね。

58

吉田慎一郎 二回生

臨書 『高貞碑』 折帖

「君諱貞。字羽眞。勃海脩人也。．．．」

59

星出茉莉 一回生

臨書 王献之『地黄湯帖（鬱岡齋帖）』 半切

「前所論事。想必及。謝生未還何尔。」
力強く書くことを意識しました。

前所論事想必及
謝生未還何尔

60

柳田陸 一回生

臨書 顔真卿『多宝塔碑』 全紙

「大唐西京千福寺多寶佛塔感應碑文。 南陽岑勛撰。 朝議郎判尚書武部員外郎」
大学から書道を始めた子たちがいいそと楷書を練習しているのを見て、自分
も久しぶりに楷書の作品を書きたくなってしまう。 やつぱり楷書は書く
ほどに味わい深いものです。

大唐西京千福寺多
寶佛塔感應碑文南
陽岑勛撰朝議郎判
尚書武部員外郎

61

松阪明日香 三回生

創作 『寄り添う』 半切横二枚

「先頭をゆくシヤボン玉 虹色を浴びせて秘密の在処教える
真夜中を漂うふかふか宇宙船 めいぐるみの手に舵を預けて」
大切にしている記憶の短歌です。 いろいろ創作するのって楽しいな。」

先頭をゆくシヤボン玉 虹色を浴びせて秘密の在処教える
真夜中を漂うふかふか宇宙船 めいぐるみの手に舵を預けて

62

松田陽南子 二回生

臨書 橘逸勢『伊都内親王願文』 半切

「側聞、惟父惟母、慈之悲之者、彼無上大覺」
有名な作品で比較的シンプルな字面ですが、こだわって仕上げました。

側聞惟父惟母慈之悲
之者彼無上大覺
陽南子

63

由里本陽香 四回生

創作 『光陰如流水』 半切

「光陰如流水」

これまでの大学生活四年間を振り返ると本当にあつと言いました。残り二年、大事に過ごしていきたいと言う気持ちを含めて書きました。

光陰如流水
陽香

64

柳田陸 一回生

臨書 伝藤原行成『升色紙』 色紙

「ふゆながらはるのとなりのちかければながきよりぞはなはみえける」
初めての仮名作品です。冬が終わりに近づき、もうすぐで春になるという歌を選びました。

ふゆながらはるの
ちかければながき
よりぞはなはみえける
柳田陸

65

中野花音 二回生

創作 『Bump of 』 全紙二分の一

よりうしろ
えける
中野花音

「鶏」

大学生活、鶏むね肉の安さに支えられています。ありがたい。

「③召筆左右馳求、更無一二管。先所出来是也。不有如然之御用。若今明求得、

①〈佐理〉謹奉恩命、恐々

④追將経御覧耳。

②戦々。抑彼箭事、一日以亜将返報為令御覧、馳奉已了。而今有此命。驚怪不少計也。弊文落失歟。只今召間可蒙処分。須彼緒風所陳、以件箭、相替左衛門尉兼

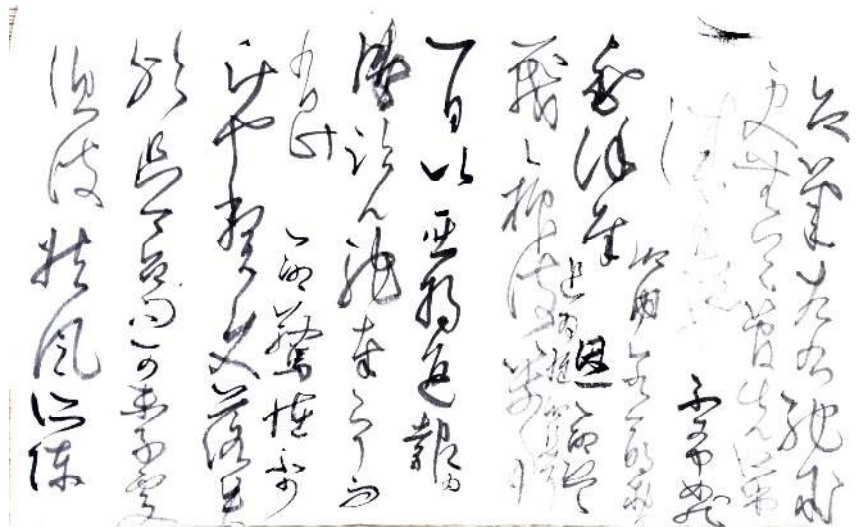
澄箭著用、若猶可

然。闕自用返送欲見其気色。若彼親重朝臣箭侍歟。将称難決之由歟。承重命、将進返

之由執申也。返々参申待。若遂無他箭、重案内耳。不具謹状。

⑤即刻 愚奴、〈佐理〉」

書道を始めた頃からずっと私の心を捉えて離さない佐理様の書を、ほぼ原寸大で臨書しました。大胆に歪曲された字形、それを繋ぐ伸びやかな連綿、行間の響き合い、そしてこんなに魅力がてんこ盛りなのに全体としての謎の落ち着き。痺れるつしよ、知らんけど。



67

山田健太 三回生

創作 『徒然草』 二六

「徒然なるままに日暮らし硯に向かひて心にうつりゆく由なしことを、そこはかとなく書き付くれば、あやしくこそその狂ほしけれ。」

中学生の時にこの文章を読んだときは、「何がそんなに退屈で一日中そんなことしてんねん暇人かよ」と笑い飛ばしていましたが、今日思い出した時は、不思議なことに最近の自分の心境にピッタリだなと感じました。心づくしの秋のせいか、最近はまだ体に力が入りません。一日硯に向かってみようかなあゝ

68

吉田慎一郎 二回生

創作 『若鮎』 半切

「若鮎の二手になりて上りけり」
正岡子規の俳句です。

69

乾未樹（修士二回生）、釜田弘一朗（六回生）、近藤毅（六回生）

創作 『有難う』 全紙

「有難う」

六年間、ありがとうございました。

「かうなる日 わにおちけりや かたかげに まつばはふりぬ くちばが上に」
 個人的には「朽葉」のイメージが特に気に入っていたため、この発想をもとに構成を考えました。紙の色や作品名も、このイメージから取り入れています。このように、紙の色や線の強弱といった要素が和歌の解釈にどのような影響を与えるかを考えることも楽しみの一つでした。



「自古逢秋悲寂寥，我言秋日勝春朝。晴空一鶴排雲上，便引詩情到碧霄。」
 倪元璐を入れてみました。



あまり描かない文字体で書いてみました。

73

吉田慎二郎（二回生）
創作 『新幹線』 全紙

「新幹線」

横顔新幹線やん



74

中野花音（二回生） 植村亮（三回生）
創作 『改』 酒バケ』 半切

「山崎 碧 白州……」

決して酒カスではありません。お酒は嗜む程度です。

75

青山尊（四回生）、木村隼翔（四回生）、小谷大翼（四回生）、城本昌明（四回生）、須田光太郎（四回生）
創作 『道徳為師友』 半切

「道徳為師友」

念願の四回生男子が揃った合作です。

道徳為師友

76

樋口珠穂（二回生）、松田陽南子（二回生）
創作 『春よ、来い』 半紙二枚

「淡き光立つ俄雨いとし面影の沈丁花溢るる涙の蕾からひとつひとつ香り始める」

七月十一日の夜、それぞれの家にいた二人が何の前触れもなしに『春よ、来い』の歌詞で創作をしてみたいと思い立ったという奇跡をきっかけに成立した合作です。

77 中野花音（二回生） 水嶋蒼来（三回生）
創作 『いこ』 色紙

「どっかに行こうと私が言う どこ行こうかとあなたが言う
ここもいいなと私が言う ここでもいいねとあなたが言う
言ってるうちに日が暮れて ここがどこかになっていく」
この流れでいつもサイズかスタバになります。二十一歳そろそろバリエーシ
ョンを増やしていきたい、そんな二人の作品です☆

78 加藤杏次郎（二回生） 妹尾直弥（二回生） 中野花音（二回生）
創作 『傷我癖』 180×360cm

「傷我癖」
痛いの痛いの飛んで行け

79 加藤杏次郎（二回生）、星野真帆（二回生）
創作 『悟りを開く』 半紙

「悟開」
常に悟りを開く姿勢を見せてきたことで、作れる料理が一品増えました。

80 中西結希乃（四回生）、由里本陽香（四回生）
創作 『一期一会』 色紙

「はなれてもひとりぼっちになるわけじゃないよ。あたしはいつでもアンタの
所へ飛んできるから。」
念願の合作です。この出会いに感謝します。

はなれても
ひとりぼっちに
なるわけじゃないよ。
あたしは
いつでも
アンタの所へ
飛んできるから。



「心にある花をいつまでも咲かせよう 終わりという始まり

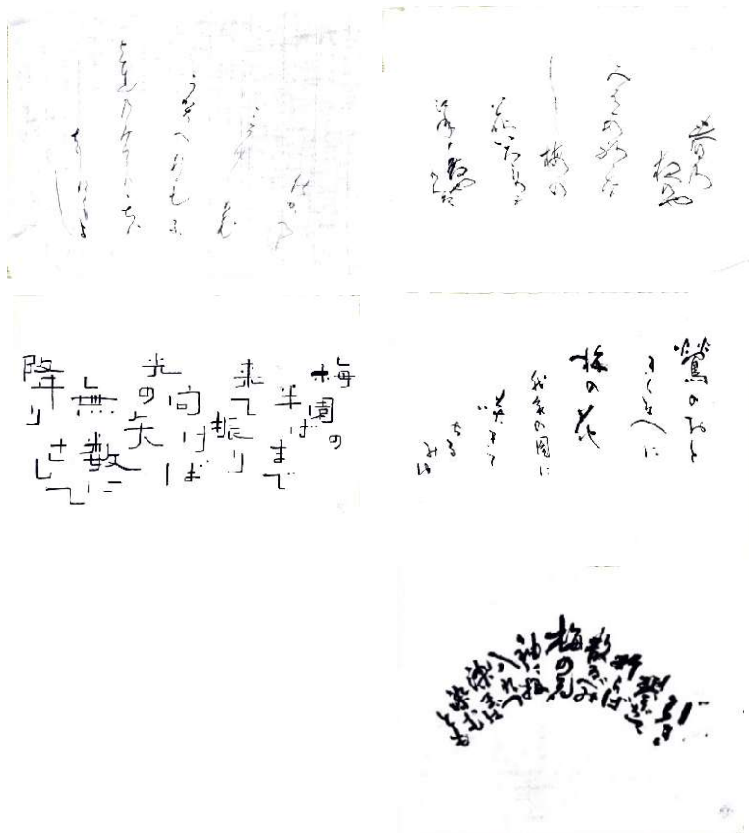
始まりという名の終わり 僕はまだ歩いてく 僕達がまだ歩いてく

ひたすらに続く 未来が見たい ひとひらの淡い 奇跡を見たい 萬花繚乱」

四回生の卒業合作です。みんなこれまでありがとう！これからもよろしく！

萬花繚乱

最近影山くんに教えてもらってパスタをつくるようになりました。成功経験はまだなし。あ、五代にわたる部長合作です。歴史のにおい。



京大出身の俳人、山口誓子の句を三つ集めました。二月ということで梅がテーマです。また三人で合作しようね♪

さはりたる

人々を救ふ

「迢々訪仙城。・・・」

道法心機
萬水回春
初春時節
萬生度世
奉祀
到軍地
大雪來
人生運
道法心機

近藤毅（六回生）、須田光太郎（四回生）

創作 『游雲』 二二六

「游雲 朝の霞に影落とす 烏山を越え越え何処へ行く 夕陽射したる鴨川で墨を落として何を書く」

お互いの故郷の名を散りばめた創作詩文による合作です。



加藤杏次郎（二回生） 妹尾直弥（二回生） 中野花音（二回生） 吉田慎二郎（二回生）

創作 『四寸法師』 全紙二分の一

「四寸法師」

四寸法師はりんご一個分です。鬼を四体まで倒すことができます。それが限界です。



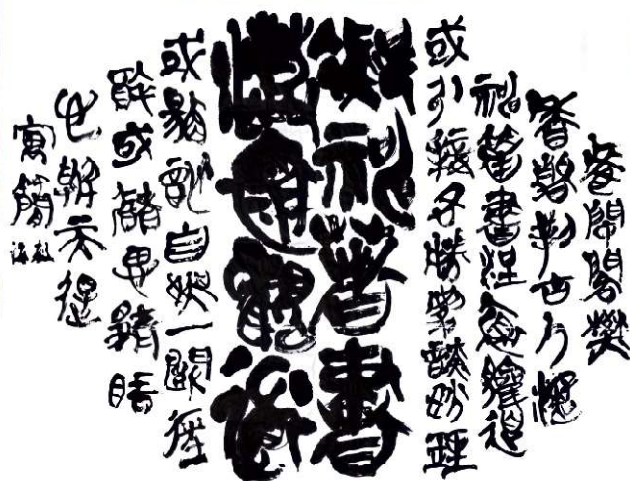
87

戸高海（五回生）、近藤毅（六回生）

創作 『凝神著書澄懷觀道』 105×136cm

「毎閑閑焚香 靜對古人 凝神著書 澄懷觀道 或引接名勝 劇談妙理 或觴詠自娛 一斗徑醉 或儲思靜睡 心與天遊。」

二人が出したアイディアがちょうど均等ぐらいに反映されている気がします。春からは離れ離れになりますが、またいつか合作したくなる一作でした。



88

倉橋あい（修士一回生）、須田光太郎（四回生）

創作 『藍炎寄縁』 色紙

「藍炎寄縁」

炎の青い色って、燃え盛ってる、って感じでいいですね。



89

中野花音 二回生

創作 『淑気黄鳥』 二八

「獨有宦游人 偏驚物候新 雲霞出海曙 梅柳度江春 淑氣催黃鳥 晴光轉綠蘋 忽聞歌古調 歸思欲沾巾」

こういうの好き〜を作品にできましたあ。二八横書けてうれしいなあ。黄色が好きだから黄につられてこの詩にしました。

櫻井すみれ（一回生）、岩崎沙奈（二回生）、加藤杏次郎（二回生）、妹尾直弥（二回生）、中野花音（二回生）、永田はるな（三回生）、八木宣大（三回生）、

山田健太（三回生）、リード・オリ（四回生）、岡雅博（五回生）

臨書 伝紀貫之『寸松庵色紙』 二二六

「むめのかを…（櫻井）、しものたて…（岩崎）、ちはやふる…（加藤）、わがきつる…（妹尾）、あきかぜの…（中野）、あきかぜに…（永田）、さきそめし…（山田）、よしのがは…（八木）ゆぶづくよ…（オリ）、わがせこが…（岡）」
寸松庵色紙を十人で合作しました。



植村亮（三回生）、戸高海（五回生）

創作 『出塞行』 二六二聯

「白草原頭望京師 黃河水流無盡時 秋天曠野行人絕 馬首東來知是誰」
お互いの草稿を交換し、清書しました。個性の混ざり合い、いや、ぶつかり合い
です!!!!

白草原頭望京師 黃河水流無盡時
秋天曠野行人絕 馬首東來知是誰

四回生

農	青山	尊
薬	浅雛	穂乃花
経済	浅山	桃佳
文	岡島	日菜子
医	木下	美優
文	木村	隼翔
医	小谷	大翼
交換留学	Chou	Jyun man
文	城本	昌明
文	須田	光太郎
農	鶴岡	直穂
法	中西	結希乃
総人	二宮	海椰
文	南出	祐希
工	山下	理子
薬	由里本	陽香

五回生

教育	飯田	望未
兵医	岡	雅博
農	戸高	海

六回生

医	釜田	弘一朗
医	近藤	毅

修士一回生

理	川久保	毅
理	倉橋	あい
理	凌	榆凱
理	乗杉	玲壽
教育	平田	奈々子
アジア・アフリカ研	緑川	茉歩
情報	Li	Haoxuan
農	Yu	Kai-Li

修士二回生

農	乾	未樹
情報	朱	帰然

修士三回生

工織	Chen	Yueh Chen
----	------	-----------

博士一回生

農	柴田	達哉
---	----	----

研究生

文	宋	曉萌
---	---	----

【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科准教授 成田健太郎

京都大学大学院文学研究科准教授 田中健一

技術顧問：日展会友 書家 大原蒼龍

一回生

農 生野 尊彦
法 石川 和樹
工 遠藤 祐吾
経済 越智 夢生
京女 桂木 結紅
薬 河合 真弥
文 越中 優奈
薬 近藤 咲耶
京女 坂本 莉子
文 櫻井 すみれ
総人 新長 慎之助
工 竹内 悠太
農 田嶋 将英
法 田中 碧
ダム女 洞井 美菜子
同志社 遠山 奈々香
工織 奈良岡 諒亮
文 野村 百加
同志社 原田 明澄香
工 藤木 庸
法 星出 茉胡
文 柳田 陸

二回生

文 池内 紗世
京女 岩崎 沙奈
農 小川 絢加
農 奥川 ほのか
工 影山 稜真
工 加藤 杏次郎

京女 川上 雪乃
理 喬 奕翔
京女 酒井 悠希
工 鈴木 理仁
農 妹尾 直弥
農 戸邊 晃平
同志社 中野 花音
総人 樋口 珠穂
文 廣田 千裕
同志社 星野 真帆
農 松田 陽南子
医 吉田 慎二郎

三回生

総人 植村 亮
京薬 川崎 麻衣
総人 齋藤 亜紀
文 永田 はるな
理 中野 葵
工 藤井 航平
総人 松岡 加純
農 松阪 明日香
大阪 三木 優奈
大阪 水嶋 蒼来
工 宮原 康輔
立命館 八木 宣大
医 山田 健太
文 リーイーウェイ
文 石河 圭太
京府 松井 康平
ILAS リード・オリ

銘筆・名硯・古墨・文房四寶の店



香雪軒

OPEN 10:00~19:00
(不定休)

〒604-0912
京都市中京区二条通河原町東入ル
mb 090-3495-4060
TEL 075-231-1695 FAX 075-231-8768
e-mail nagaoka@kousetsuken.com



山中表具店

〒604-8102

京都市中京区姉小路通富小路西入菊屋町 567

TEL : 075-221-3381 FAX : 075-252-1987

<https://www.yamanaka-hyoguten.com>

文房四寶(筆・墨・硯・紙)和紙工芸品 書画作品



書芸サロン 賛交

〒605-0992

京都市東山区鞘町通七条上ル下堀詰町242

TEL/075-541-1112 FAX/075-541-1113

E-mail/info@shoga-sankou.co.jp

京都・書道用具店

松栂園

一般用の書道道具からプロ専用の用具
まで幅広く取り扱いしております。小売も
しておりますので、お気軽にお越し下さい。

取扱商品

書道用具全般
毛筆・松栂園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具

京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164

TEL 075-351-6380 FAX 075-361-8006

<http://www.shoubaien.co.jp> 定休日(日・祝日)



ダウンロード
無料!

書道用品店 書遊 公式アプリ

SHOYU OFFICIAL APP

すぐ使えるおトクなアプリ

お得な SALE 情報やクーポン配信、スタンプ
ポイント機能など。

さらに便利に、さらに楽しい書道ライフを。



本書展開催に際しご協賛を賜りました。

心よりお礼申し上げます。